



# 幕末～昭和初期の 日露関係史の知られざるエピソード

日程

第1回  
4/4

第2回  
4/18

第3回  
5/16

第4回  
5/30

15:30～17:00

講師 ロシア・東欧学会会員  
上野 俊彦

[uenot\\_gosudarstvo@yahoo.co.jp](mailto:uenot_gosudarstvo@yahoo.co.jp)  
<http://uenot.g1.xrea.com/><sub>1</sub>

# 第3回 神田ニコライ堂 の話

- ①2024/4/4 15:30~  
ヘダ号の話
- ②2024/4/1 15:30~  
ニコライ皇太子の来日
- ③2024/5/16 15:30~  
神田ニコライ堂の話
- ④2024/5/30 15:30~  
満鉄と哈爾浜 (ハルピン)



# 第3回講義 神田 ニコライ堂の話 概要

- 1 正教とは何か
- 2 ロシアにおけるキリスト教の受容
- 3 宣教師ニコライの日記
- 4 宣教師ニコライの来日までの経緯
- 5 宣教師ニコライの活動

## この講義の目標

- ①正教について知る。
- ②ロシアにおけるキリスト教の受容について知る。
- ③宣教師ニコライについて知る。
- ④ニコライ堂の由緒について知る。

## 本講義の参考文献

- 廣岡正久『宗教の世界史10 キリスト教の歴史3 東方正教会・東方諸教会』（山川出版社 2013）
- 中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』（岩波書店 1996）
- 中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記（全9巻）』（教文館 2007）
- 日本正教会ホームページ <https://www.orthodoxjapan.jp/index.html>
- 函館ハリストス正教会ホームページ <https://www.orthodox-hakodate.jp/>

# 正教とは何か①

## キリスト教の始まり

紀元1世紀初期 イエス、パレスティナのガリラヤ地方で説教、伝統的なユダヤ教ファリサイ派を批判、「神殿から商人を追い出す」などと主張。

紀元30頃 イエス、神殿貴族サドカイ派により政治犯として訴えられ、エルサレム近くのゴルゴタの丘で**十字架刑**。イエス処刑後、弟子たちがイエスの教えを広め、それを**キリスト\*教**と呼ぶようになる。

\*「キリスト」はヘブライ語の「メシア=膏（あぶら）を注がれた（塗られた）者の意」の古典ギリシア語訳「クリストス」の日本語カナ表記。古代イスラエルでは予言者、祭司、王に膏を塗る習慣があったことから、イエスを予言者・祭司・王である、すなわちキリストであるイエス=イエス・キリストと呼び、その教えをキリスト教と呼ぶようになった。なお、日本正教会では近代ギリシア語・ロシア語の「フリストス」のカナ表記「ハリストス」を用いる。

## キリスト教の拡大

301頃 **アルメニア、キリスト教を国教とする**。アルメニアでは、現在でも「アルメニア正教会」（正式には「アルメニア使徒教会」）の信者が最も多い。最も有名なアルメニア・ブランデーの名前にもなっている「アララト」は、現在トルコ領にある山だが、アルメニア使徒教会の聖地であり、旧約聖書の物語であるノアの箱舟の流れ着いた場所として知られている。

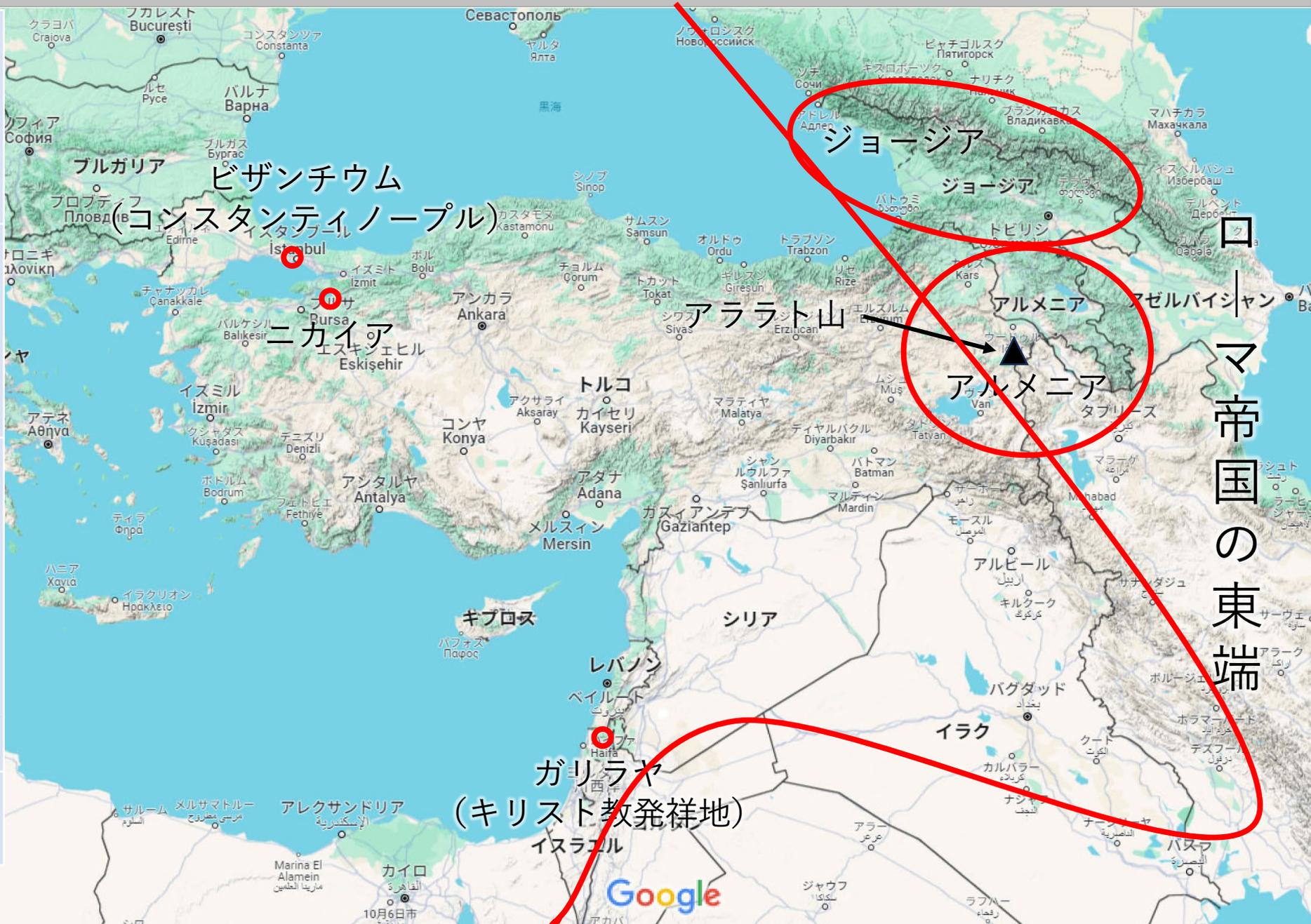
313 **ローマ帝国、キリスト教を公認**。当時のローマ帝国人口の10%程度がキリスト教徒だったと推定される。

325 **ニカイアで第一回公会議**。公会議は、各地の教会から司教（主教）等の正規代表者が集まり、キリスト教の教義・典礼・教会法などについて審議決定する最高会議である。ニカイア第一回公会議では、三位一体を形成する三者、父なる神・子なるキリスト・聖霊の関係について、**「父と子の同一実体」説**、**「聖霊は父から発する」**との解釈（**「ニカイア信条」**）が提起された。三位一体の三者の関係は、キリスト教の教義において最も重要であり、その解釈をめぐり多くの論争が起き、キリスト教の東西分裂の遠因ともなった。

330 ローマ帝国皇帝コンスタンティヌス1世、**ローマからビザンチウム（現イスタンブール）に遷都**。皇帝の名からコンスタンティノープル（コンスタンティノポリス）とも言う。

# 正教とは何か②

350	エチオピア北部の <b>阿克苏ム王国</b> 、キリスト教を国教とする。現在のエチオピア正教会に連なる。
350頃	<b>ジョージア</b> 、キリスト教を国教とする。ジョージアでは、現在でも正教会が広く信仰を集めている。
381	コンスタンティノーブル第二回公会議。ニカイア第一回公会議の「三位一体」解釈を確認。「子」の従属性を主張するアリウス派を異端とし、教義の正統を守る。
392	<b>ローマ帝国</b> 、キリスト教を国教とする。



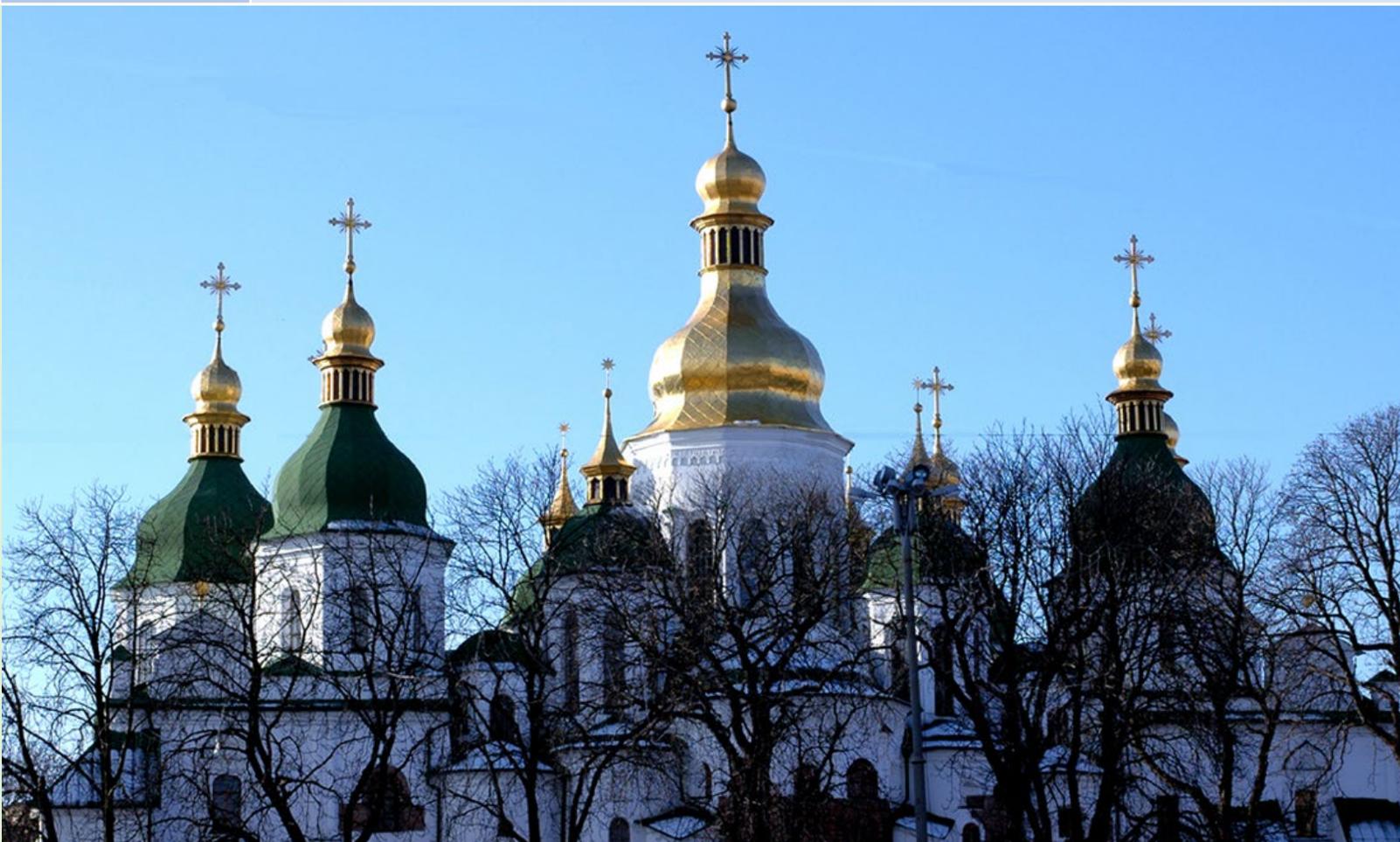
# 正教とは何か③

## ローマ帝国と教会の東西分裂

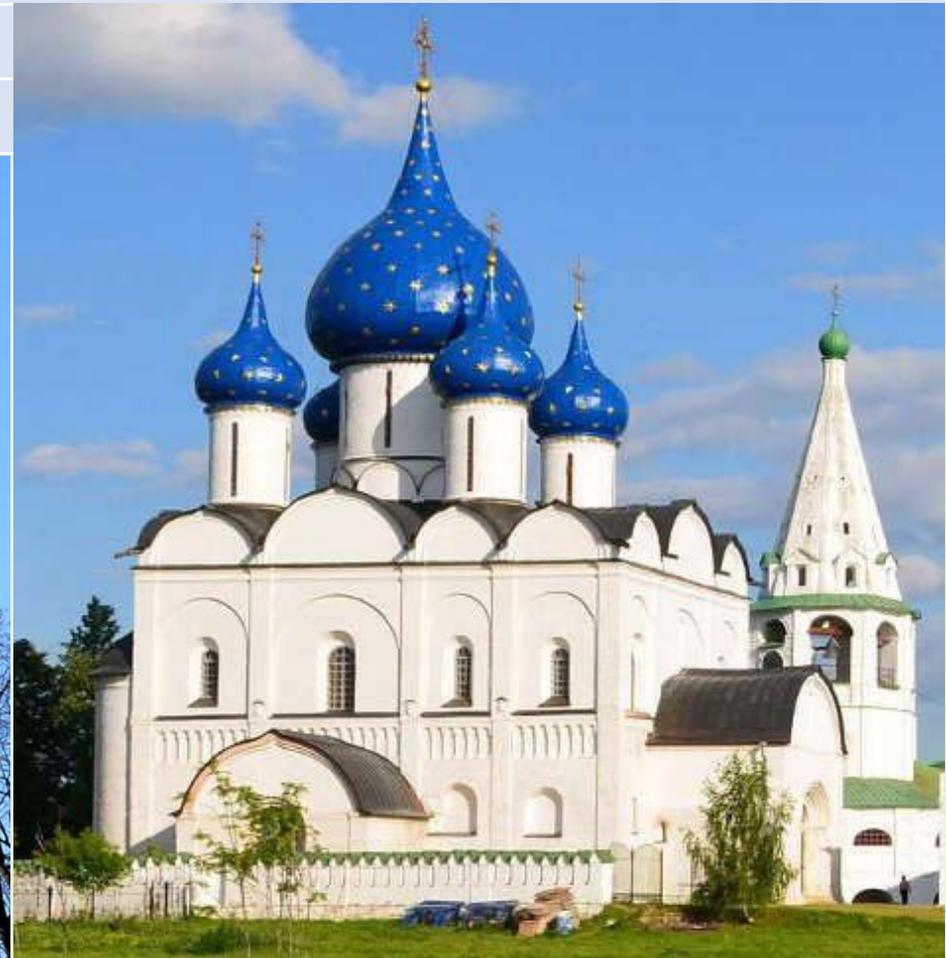
395	ミラノを首都とする西ローマ帝国が成立、ローマ帝国が東西に分裂。
431	エフェソス第三回公会議、「信条」の改変を禁止。この頃、教会制度が確立され、使徒ペテロが殉教したローマ教会、次いで首都コンスタンティノープル教会が高い地位を占めた。
550頃	ユスティアヌス帝、東西ローマ帝国を再統一。
730	ローマ皇帝レオン3世、旧約聖書のモーセの十戒の「偶像禁止」を根拠にイコン崇敬を禁じる勅令（聖像禁止令）を発令。ゲルマン人への布教に聖像を用いていたローマ教会、この決定を非難、コンスタンティノープルへの納税を停止。これによりローマ教会のトップであるローマ教皇と、ローマ皇帝・コンスタンティノープル総主教との関係が悪化。
787	レオン3世の孫のレオン4世の皇后エイレーネー（アテネ出身）がニカイア第七回公会議を主宰、イコン崇敬の正統性を再確認。しかし、東西教会の関係悪化は修復できず。
800	ローマ教皇レオ3世、フランク王国カール大帝に帝冠を与え、「西ローマ帝国」の復活を宣言。
863	ローマ教皇、コンスタンティノープル総主教フォティオスを破門（ローマ教会では「離教」）。背景に、ローマを中心とする西方教会では三位一体のうちの「聖霊」が「子からも」（フィリオクェ）発出するとの考えが強かったのに対して、コンスタンティノープル総主教が「信条」の改変を禁じた431年のエフェソス第三回公会議の規程に基づきこれを強く否定したことがあった。
1054/7/16	ローマ教皇使節の枢機卿フンベルトゥス、コンスタンティノープルを訪問し、「信条」からの「フィリオクェ」の削除、聖職者の妻帯の慣行等を根拠に、コンスタンティノープルの聖ソフィア教会に、コンスタンティノープル総主教ケルラリオスの破門状を提出。これに対し、ケルラリオスは、逆に教皇使節を破門し、ついに東西両教会が分裂。これ以降、東方教会を（東方）正教会と呼ぶようになった。

# ロシアにおけるキリスト教の受容①

988	キエフ・ルーシのウラジーミル大公（ウラジーミル1世、在位980～1015）、キリスト教の洗礼を受け、ローマ帝国皇帝バシレイオス2世の妹アンナを妻とし、キリスト教を国教とする。
11世紀前半	スラヴ語典礼の導入。
1037	キエフ・ソフィア大聖堂創建。



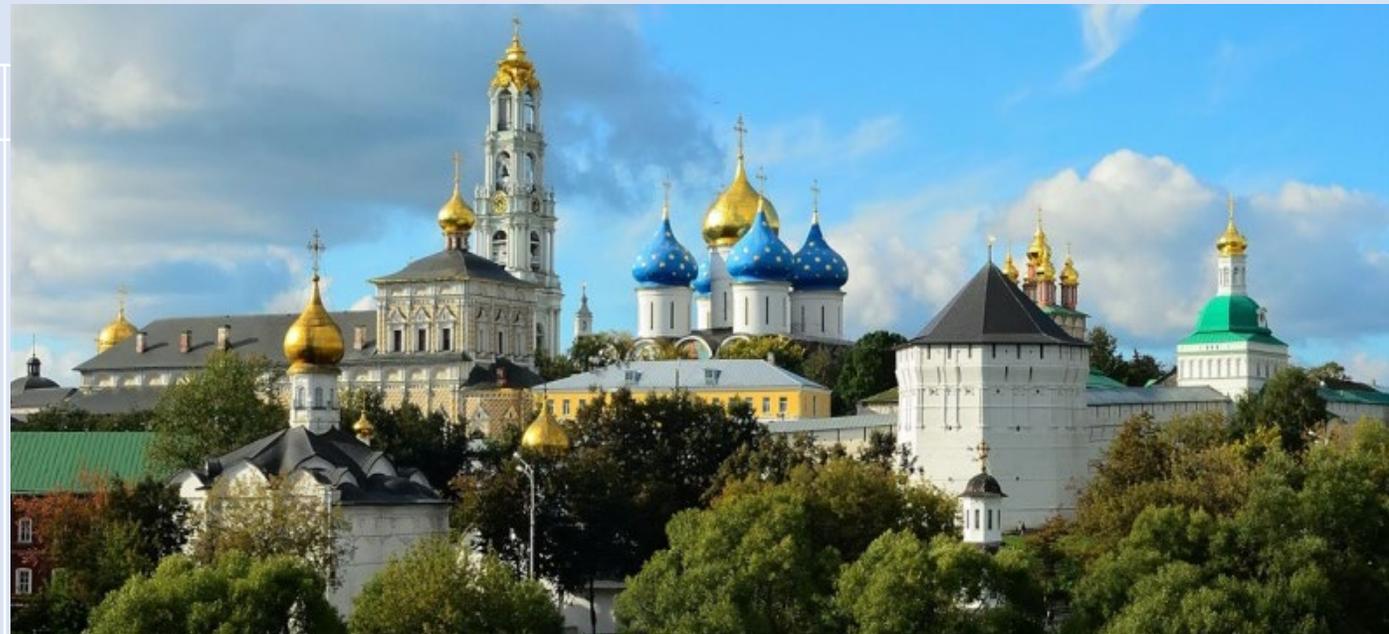
ソフィア大聖堂（キエフ、1037年創建）



至聖生神女誕生教会（モスクワ東方スーズダリ、1222年創建）。至聖生神女（しせいしょうしんじょ）は西方教会（カトリック・プロテスタント）でいう聖母マリアのこと。

## ロシアにおけるキリスト教の受容②

1223	モンゴル軍、ルーシ南部に侵入
1237	モンゴル軍、ルーシ東部から侵入、ルーシ人の居住地の東部から南部にかけての大部分、モンゴル（キプチャク・ハン国）によって支配される。この後、モンゴル軍に対抗したキエフは荒廃し、逆にモンゴルの支配下でキリスト教の信仰を維持することになったモスクワ公国が台頭。
1310	ルーシ人のキリスト教信仰の中心であったキエフ府主教座がモスクワに移転、モスクワ府主教となる。
1380	モスクワ公国軍、クリコヴォの戦いでキプチャク・ハン国軍に大勝、モスクワが発展の足がかりを築く。
1439	オスマン帝国の攻撃にさらされたローマ帝国がローマ教皇に支援を求めると、教皇は東方教会の服従を求め、フィレンツェ公会議で東西教会の合同が決定されたが、東方教会の多くはこれに反発、モスクワのイワン3世（在位1462～1505）もこれに反発、ギリシアから派遣された府主教を合同に賛成しているとして廃して、モスクワ総主教の独立を達成。
1453	ローマ帝国崩壊。
1472	ローマ教皇は、イワン3世懐柔のため、ローマ帝国最後の皇帝コンスタンティヌス11世の姪ゾエ（ソフィア）をイワン3世に嫁がせたが、イワン3世はこの結婚でローマ帝国皇帝の正当な後継者を名乗ることとなり、自ら「ツァーリ」（ローマ帝国皇帝の称号カエサルロシア語）と称し、ローマ帝国国章の双頭の鷲をモスクワ公国の国章として採用、モスクワは「第三のローマ」を自称するようになった。



# 宣教師ニコライ\*の日記

宣教師ニコライ\*（のちニコライ大主教、本名イヴァーン・ドミートリエヴィチ・カサートキン、1836/8/13～1912/2/16、なお1970/4/10に聖人に列せられ使徒大主教聖ニコライと呼ばれるようになった）は、幕末から明治期にかけての日露文化交流の最大の功労者であるが、文献資料がないため、いつしか歴史に埋もれかけていた。



1912年（明治45年）2月16日のニコライ大主教の死後、ニコライ大主教の書き残した日記その他の文献資料は関東大震災（1923/9/1）で全て焼失したと信じられていたため、神田ニコライ堂（日本ハリストス正教会復活大聖堂）の創建者であるニコライ大主教は、名は知られながら知られざる人物であった。

1979年、中村健之介・東大教授(当時)が、ニコライ大主教の日記がサンクト・ペテルブルグの古文書館に保管されていることを確認し、日本における宣教師ニコライの活動について、多くのことがわかった。

\* 最終的には大主教に叙聖されたので、「ニコライ（日本）大主教」とも言う。日本正教会では「使徒聖ニコライ」あるいは「聖ニコライ」と呼んでいる。

なお、本講義のうち、宣教師ニコライの活動については、前掲、中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』、中村健之介監修『宣教師ニコライの全日記（全9巻）』のほか、日本正教会ホームページ「使徒聖ニコライ」の項を参考にしている。「使徒ニコライ」の章別のタイトルとアドレスは以下の通り。

「ロシア領事館と箱館聖堂」 (<http://www.orthodoxjapan.jp/hakodate.html>)

「聖ニコライの渡来」 (<http://www.orthodoxjapan.jp/raikou.html>)

「宣教の初穂」 (<http://www.orthodoxjapan.jp/hatsuho.html>)

「上京と教勢拡張」 (<http://www.orthodoxjapan.jp/joukyou.html>)

「明治文化とニコライ」 (<http://www.orthodoxjapan.jp/meiji.html>)

「地上の教会から天上の教会へ」 (<http://www.orthodoxjapan.jp/tenjou.html>)

# 宣教師ニコライ来日までの経緯

1836/8/13	イワン・ドミートリエヴィチ・カサートキン、スモレンスク県ベーリ郡ベリョーザ村の教会の輔祭の子として生まれる。
1857	カサートキン、スモレンスク神学校を首席卒業、官費生としてサンクト・ペテルブルク神学大学入学。
1858/10/24	プチャーチン使節の中国語通訳であったヨシフ・アントーノヴィチ・ゴシケーヴィチ（1814～1875/10/5）、箱館のロシア領事館の初代領事として着任。同時にプチャーチン使節のディアナ号の艦付き司祭であったワシーリー・マーホフが領事館付き長司祭として着任。しかし、マーホフは着任時すでに60歳の高齢であったため、ゴシケーヴィチ、宗務院に後任の派遣を要請。日本において将来、布教が許可される可能性を示唆し、有能な司祭を求める。
	カサートキン、「ゴロヴニンの手記（『日本幽囚記』）によって日本民族への愛情がわいた」ため、妻帯司祭ではなく修道司祭として来日を決意。
1860/7/4	カサートキン、応募者4名の中から選ばれ、箱館ロシア領事館付司祭に任命される。剪髪式を受けて修道士となり名をイオアンからニコライへと改める（以下、宣教師ニコライとする）。
7/12	宣教師ニコライ、ペトル・パウエル祭の日にサンクト・ペテルブルク神学大学の十二聖使徒聖堂で司祭に叙聖。
8/13	宣教師ニコライ、家族と別れ日本に向けシベリア横断に出発（シベリアを馬・船で横断）。別れの際、父ドミートリーからキリストの聖像をもらう（生涯ニコライの自室にあったと言われる）。
9月下旬	宣教師ニコライ、サハリン北端の大陸側、アムール川河口近くのニコラエフスク（現ニコラエフスク・ナ・アムーレ）に到着。アラスカで宣教の経験を持つ、のちのモスクワ府主教イノケンティ（1797/8/26～1879/3/31）と出会い、聖書と祈祷書を宣教地の言語に翻訳し正教の土着化を計ることを教えられる。
1861/6/14	宣教師ニコライ、ロシア軍艦アムール号で箱館に到着、箱館ロシア領事館付司祭として着任。

# 宣教師ニコライの活動 ①

～1864	西蝦夷警備のため派遣された秋田の久保田藩兵とともに箱館に来ていた軍医・儒学者木村謙斎から日本語・日本史・日本文化について学ぶ。
1864/4	航海術を学ぶため箱館に来た新島襄（当時22歳、のちの同志社創設者）から日本語・日本史を学ぶ。
1868/4	新島の脱国・渡米を助けた攘夷派宮司の澤邊琢磨（洗礼名パウエル）、医師の酒井篤礼（とくれい）ら3名にキリシタン禁制下、洗礼を授ける。
1869初め	日本宣教団設立の請願のため一時帰国。プチャーチン（日魯通好条約締結後、海軍軍人から政治家に転進し、1861年国民教育相、その後国家評議会議員に勅任）、これを支援。
1870	日本宣教団（日本伝道会社）設立。団長に任命され、修道司祭から掌院に昇叙される。『宣教師ニコライの全日記』は、この年ペテルブルク滞在中の日記から始まる。
1871/3初め	函館に帰任。ロシアから持ち帰った石版印刷機を用い、『天主経』『日誦経文』『東教宗鑑』『教理問答』『聖書入門』『祭日記憶録』『聖經実蹟録』『朝晩祈祷および聖体礼儀祭文』『露和辞典』刊行。
1871/12	修道司祭アナトリイ、函館に到着。ニコライ、アナトリイに函館における伝道を任せ、上京を決意。
1872/1	函館を出港、横浜に到着。東京到着は2月4日。



箱館復活聖堂（初代聖堂）1860年創建 出典：『函館ハリストス正教会史』2011年、7頁 ([https://35bfab47-79ef-4af2-97c5-c5a51cba5e77.filesusr.com/ugd/60b7a9\\_db600396b8084582a2bbf8e0d8d57e3d.pdf](https://35bfab47-79ef-4af2-97c5-c5a51cba5e77.filesusr.com/ugd/60b7a9_db600396b8084582a2bbf8e0d8d57e3d.pdf))。

## 宣教師ニコライの活動 ②

1872/2～	ロシア皇族アレクサンドル公来日に際し通訳として明治天皇に謁見、外国人宣教師として謁見の先例を開く。東京市中巡覧、家々を一軒一軒訪ね正教を説きつつ、宣教中心地・大聖堂建立地の適地を探索し、神田駿河台の高台の2,300坪を購入、ロシア公館付属地として登記、現在のニコライ堂所在地に宣教団本部（本会）を設立し、布教活動開始。
1873	明治政府、「切支丹禁制」の高札を撤去。
1874	四谷、浅草、本所、日本橋、神田に講義所を設置、伝教者を配置。東海地方、京阪地方での布教開始。5月、初めて布教会議を東京で開催、「伝道規則」を定め、伝教者の義務、幼児の正教教育、議友（執事）の役目、公会の日時などを決める。
1875/7/12	東京で公会開催。信徒増加に伴い、邦人司祭選立を決定、東部シベリアの主教パウエル師を招聘して、函館において神品機密（神父、輔祭の神品を叙聖する儀式）を行い、パウエル澤邊を司祭に、酒井を輔祭に叙聖。これが日本における司祭の叙聖の最初である。
1876	東京本会に女学校、正教神学校を創立。
1877/11	機関紙『教会報知』第1号発行。この年、東北地方でも教勢拡大。明治期の日本正教会にはロシア人宣教師は最も多い時期でも4ないし5人（1877年の在日外国人宣教師は、カトリック45名、プロテスタント各派99名）、正教会は日本人伝教者による伝道が中心。
1879春	東京復活大聖堂建設資金募金のため2回目の一時帰国。
1880	ペテルブルクでプチャーチン一家と親交を深める。掌院から主教に昇叙。ドストエフスキーと会う。11月、日本に帰国。12月、山下りん、イコン制作修得のためペテルブルクへ留学（1883年帰国）。『教会報知』に代わり、『正教新報』発刊。
1881	群馬県・東北地方を巡回。

## 宣教師ニコライの活動 ②

1882 九州、中国、四国地方を巡回。パウエル中井木菟麿（なかい・つぐまろ）とともに奉神礼用諸書の翻訳を開始。大阪に伝教学校を開設。

1884 プチャーチンの娘オリガ、日本宣教団支援のため来日（1987年帰国）。東京復活大聖堂着工（3月）。原設計ミハイル・シチュールポフ、実施設計ジョサイア・コンドル。

1891/3/20 東京復活大聖堂竣工。

1891/5 ニコライ皇太子来日（4/27～5/19）。大津事件で負傷した皇太子を神戸港停泊中の「アゾフ記念」号に見舞う（5月）。北海道、九州の諸教会を巡回。

1892 中国、四国地方、東海道方面、上総地域、群馬県、八王子などを巡回。女性文芸雑誌『裏錦』発刊。

1893 長野県、北海道、一関、盛岡、福島などを巡回。

1894 中井とともに新約聖書の翻訳にとりかかる。

1895 この年、全国に220の教会、信徒数は約22,000名（男女ほぼ同数）。

1898 色丹島を含む北海道各地の教会の巡回。教役者の互助組織「遺族慰問会」が誕生。

1900/10 信徒家庭向け月刊誌『正教要話』発刊。



創建当時の東京復活大聖堂（ニコライ堂）

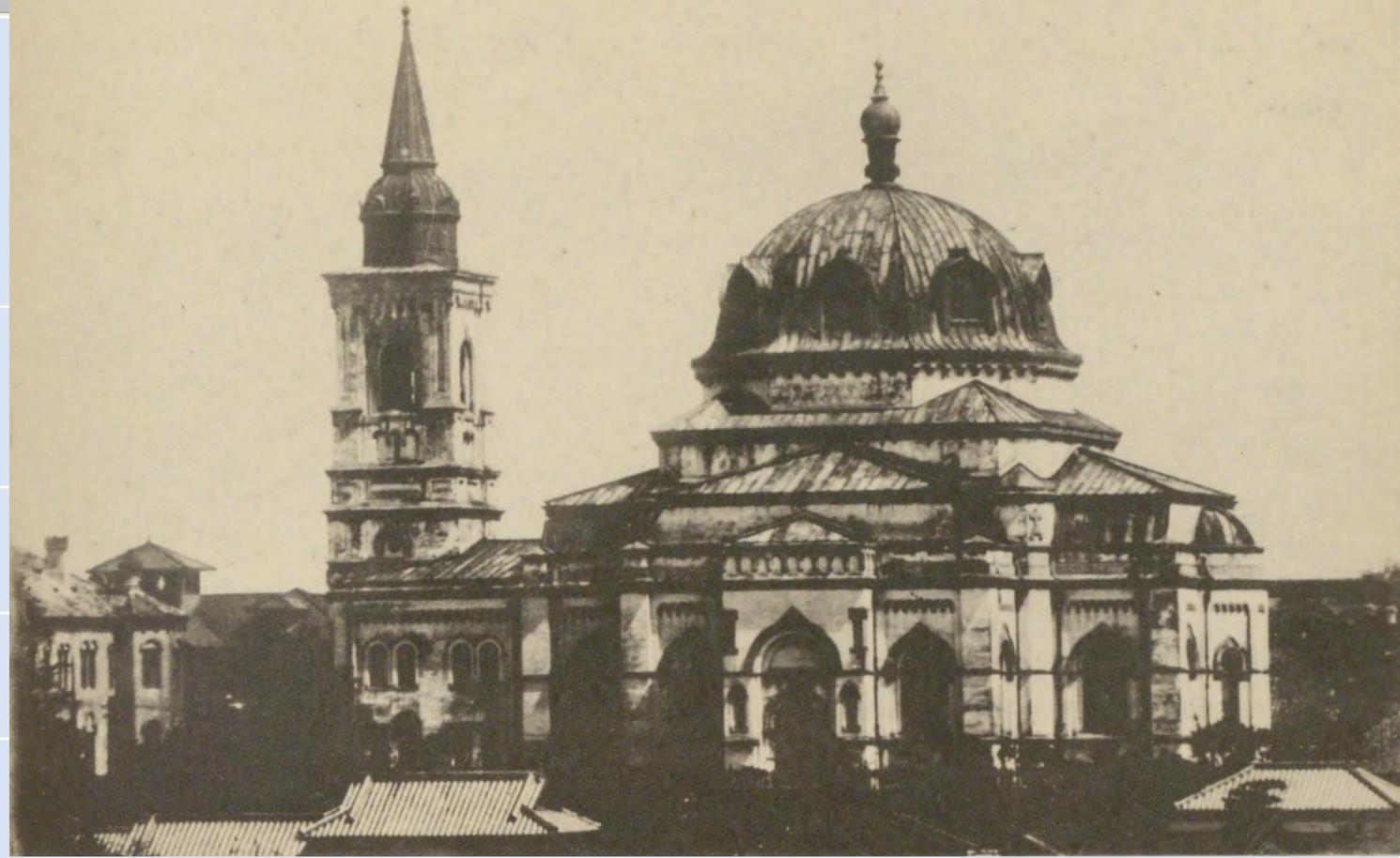
出典：ニコライ堂ホームページ

(<https://nikolaido.org/top/history/>) 13

# 宣教師ニコライの活動 ③

創建当時の東京復活大聖堂（ニコライ堂）

1891/5	皇太子ニコライ来日（4/27～5/19）。大津事件で負傷した皇太子を京都の常盤ホテルに見舞う（5月）。北海道、九州の諸教会を巡回。
1892	中国、四国地方、東海道方面、上総地域、群馬県、八王子などを巡回。女性文芸雑誌『裏錦』発刊。
1893	長野県、北海道、一関、盛岡、福島などを巡回。
1894	中井とともに新約聖書の翻訳にとりかかる。
1895	この年、全国に220の教会、信徒数は約22,000名（男女ほぼ同数）。
1898	色丹島を含む北海道各地の教会の巡回。教役者の互助組織「遺族慰問会」が誕生。
1900/10	信徒家庭向け月刊誌『正教要話』発刊。
1901	正教会訳『我主イイスス ハリストスノ新約』刊行。
1904/2/8	日本陸軍、朝鮮の仁川に上陸（日露戦争開戦）。
2/9	日本海軍、旅順港のロシア軍艦2隻を撃沈。



## 宣教師ニコライの活動 ④

1904/2/10	日本、ロシアに宣戦布告。ニコライの主教教書「神に祈りてなんじらの皇軍に勝利を賜わんことを求めよ」。ロシア駐日公使ローゼン、公使館全員の退去を決定。ニコライにも帰国を促すが、ニコライはとどまることを決意。ロシア正教会信徒をロシアのスパイ（露探）呼ばわりする風潮蔓延。ニコライ、ロシアの敗北に恥辱を感ずる（愛国心の高揚）。
1905	約79,000名のロシア兵捕虜の「信仰慰安」に全力を尽くす。日露戦争終結（9/5ポーツマス条約調印）。
1906/4/6	ロシア宗務院より大主教に昇叙される。
1911	日本宣教50周年記念祝賀会。この年、信徒31,984名、教会265、聖職者41名、聖歌隊指揮者15名、伝道師121名。
1912/2	心臓病が悪化、聖路加病院に入院。その後、主教団に戻る。
2/16 19:00	永眠（75歳）。22日、東京復活大聖堂で葬儀。谷中墓地に葬られる。「遺業は、大聖堂1、聖堂8、会堂175、教会276、主教1、司祭34、補祭8、伝教者115、信徒総数34,111であった」。
2/22	東京復活大聖堂で葬儀。谷中墓地に葬られる。「遺業は、大聖堂1、聖堂8、会堂175、教会276、主教1、司祭34、補祭8、伝教者115、信徒総数34,111であった」。
1917	日本正教会、ロシア正教会との関係断絶。
1923/9/1	関東大震災により東京復活大聖堂は倒壊、炎上。
1927/9/25	東京復活大聖堂復興工事着工。1929/11/30復興工事終了。
1945～	日本正教会、在米ロシア正教会と関係を構築。
1970/4/10	日本正教会、モスクワにおいて総主教アレクセイより、聖自治教会（アウトノモス）の祝福を得る。同日、ニコライ大主教、ロシア正教会において「亜使徒」として聖人に列せられる。

# 宣教師ニコライの伝道の特徴

日本語を習得して伝道している。

1861年6月14日に来日してから8年目の1868年10月のモスクワ府主教イノケンティ宛書簡で、日本語を「自由に喋れるようになった」と書いており、数多くの聖典・書物等を日本語に翻訳していることも報告している\*<sup>1</sup>。また、ロシアの教会の雑誌への寄稿（書簡）で、日本語について、「元来の日本語と中国語との二つから成っていて、それが互いにまじりあっているのであるが、といて合わされて一つになってしまうことが決してない。（中略）ほとんど純中国語の訛りといえるものから卑俗な言い方まで、実に多種多様な話し言葉があり、その卑俗な言い方にも必ず、短い音節の中国語の単語が折り込まれている。文字の書き方も、まったく中国語の本そのままのものから、発音記号で書かれた本まで、実にさまざまである。後者の場合にしても、漢字が必ず入ってくる。互いに異なる種類の互いにまったく似たところのない文法の仕組みをもつこの二つの言語が出会い、相互にからみ合っている」\*<sup>2</sup>と、表記では漢字かな交じり、会話では「大和言葉」に漢語が入り込んでいるという日本語の特徴を的確に指摘している。

寒村僻地にまで足を運んでいる。

伝道（地方巡回）は、「シコタン島から始まって北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州と日本全土に及んでいる。隠岐にも行った。（中略）ニコライの旅はその土地の信徒を励まし、教会から離れた信徒を訪ねて呼び戻し、さらに新しい信徒を生み出すべく毎夜『異教徒』たちを集めて教えを説く伝道の旅である」\*<sup>3</sup>。地方でも「ニコライ」（宣教師ニコライ、ニコライ堂、日本人正教徒、のいずれをも意味する）はよく知られた存在だった\*<sup>4</sup>。

伝道における聖歌・詠隊（聖歌隊）の役割を重視し、詠隊を編成して各地を巡回している。

文部省唱歌は1910年頃に始まっているが、その30年以上前から、日本正教会では西洋音階に基づく聖歌の指導・普及が始まっていた\*<sup>5</sup>。ニコライは地方巡回の際には必ず詠隊を伴い、娯楽の少なかった地方で人を集めるのに利用したと考えられる。地方巡回の際には、美声の者を見出すと詠隊に勧誘し、各地の教会で詠隊を組織している\*<sup>6</sup>。なお、正教会では楽器の演奏は行わず、教会内にはオルガン等の楽器も置かれていない。

\*<sup>1</sup> 前掲、中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』43～44頁。 \*<sup>2</sup> 同、42～43頁。 \*<sup>3</sup> 同、118～119頁。 \*<sup>4</sup> 同、136頁。 \*<sup>5</sup> 同、110